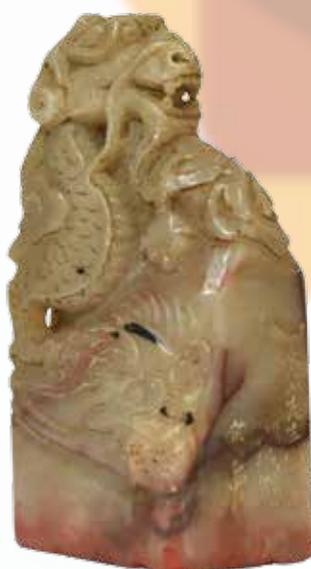


所 陵

No. 82

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



山本竟山 旧蔵「集蘭亭字廿六對之一」龍鈕石印

● 目 次 ●

木崎愛吉旧蔵「薬師寺東塔檨」拓本と命がけの手拓作業	西本 昌弘	2
大坂画壇の絵画-日本・イギリス共同研究展	中谷 伸生	4
角倉素庵『和歌短冊(雨中鶯)』の再出現	林 進	6
コロナ禍の記憶と記録を収集する「コロナアーカイブ@関西大学」の諸実践	菊池 信彦	8
播磨地方の祭礼行列	藤岡 真衣	10
本山彦一蒐集考古資料に含まれる後期旧石器時代資料について	渡邊 貴亮	12
新型コロナウイルス流行下における関西大学博物館実習と博物館実習展の取り組み		14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

木崎愛吉旧蔵「薬師寺東塔檨」 拓本と命がけの手拓作業

西本昌弘

薬師寺東塔檨銘は東塔の銅製檨管に刻まれた銘文である。薬師寺が天武天皇の「即位八年庚辰之歳」（680年）に中宮（鸕野皇女）不余のため創建され、天武没後に大上天皇（持統）が完成させたことを記す。『日本書紀』は天武元年を壬申年（672）とし、薬師寺の創建を天武9年のこととするが、この檨銘では天武元年は癸酉年（673）となるため、大友皇子（弘文天皇）の即位を裏付ける資料として注目された。文中に誤字があることから、本薬師寺の塔の銘文を模刻したものと考えられている（東野治之『日本古代木簡の研究』塙書房、1983年、236頁）。

檨は仏塔の心柱を意味する。薬師寺東塔の場合、屋上に露出した心柱を覆う銅管の基部に銘文が刻まれており、地上から約24mの高所に位置する。寛政4年（1792）、柴野栗山に随行して山城・大和の寺社所蔵古文書類を調査した屋代弘賢は、薬師寺東塔の檨銘を見るため塔頂に登ろうとした。栗山は「危シ、止メヨ、父母ノ遺体ヲ憶ハスヤ」（父母が残してくれた身体のことを考えよ）と制止したが、弘賢は屋根に登って筆を執ったという（『三宅米吉著述集』下、同刊行会、1929年、16-17頁）。



図1 木崎愛吉旧蔵「薬師寺東塔檨」拓本

関西大学博物館所蔵の本山コレクションには木崎愛吉（好尚）旧蔵の金石文拓本資料が含まれているが、その中の「薬師寺東塔檨」（A6-70）も生命の危険を顧みず手拓されたものである。本拓本の右下には「大正二年八月十七日 薬師寺東塔檨」と墨書するが、木崎はこの拓本を『大日本金石志』附図に掲載する際に、

薬師寺東塔檨一武岡氏二令息手拓所贈と記し、手拓事情の一端を明らかにしている。

また、木崎は『大日本金石志』第一巻に「薬師寺東塔檨記」と題してその釈文と解説を記述しているが、その最後に「塔頂の刻文を手拓するのは命がけの仕事である」として、屋代弘賢の逸話を紹介したのちに、木崎自身の手拓時の状況を次のように書き留めている。

わたくしも拓本が得たさに、塔の下から遙に九輪を見上げたものゝ、何うしても脚がふるへるのを感じぬ訳にはゆかなかつたが、幸に同行の武岡豊太氏の二令息が、身軽に攀じ上り、巧みに手拓して下すつたのである…。

同じく木崎旧蔵「薬師寺仏足石並銘」（A6-1-1）のうち「正面」拓本の左下にも、「大正二年八月十七日 与織田鷹洲翁武岡楽山父子共拓」と墨書があるので、大正2年（1913）8月17日、木崎は織田鷹洲（完之）や武岡乐山（豊太）父子とともに薬師寺を訪れ、仏足石と東塔檨の拓本を採拓したこと、とくに後者は武岡の二子が塔に登って手拓したことがわかる。



図2 木崎愛吉旧蔵「薬師寺仏足石並銘」拓本（正面）添書

織田完之（1842-1923）は三河出身の官僚で農業史家。内務省・農商務省で農書の調査・収集や『大日本農史』の編修にあたった。印旛沼干拓事業に尽力し、佐藤信淵・平将門の研究でも知られる。武岡豊太（1864-

1931)は淡路出身の事業家。湊川改修株式会社で改修工事を担当、湊川の付け替え工事を完成させ、新開地を開発した。勤王志士の顕彰、浮世絵の蒐集につとめ、和歌や書をよくした。

このように木崎所持の「薬師寺東塔檨」拓本は武岡豊太の二子が手拓したものであったが、その武岡豊太旧蔵の東塔檨銘拓本を東野治之氏(奈良大学名誉教授)が所蔵しておられることを、東野氏本人から教えていただいた。東野氏所蔵拓本には次のような長文の箱裏書が付されており、この拓本が手拓された際の状況が詳細に記録されていて貴重である(以下、釈文には適宜句読点を加えた)。

今茲八月十七日、好尚木崎愛吉君と南都の舊蹟を訪はむとし、偶来宿の鷹洲織田完之翁を誘ひ、博三四郎の二兄及其學友竹林嘉一郎を携へ、先薬師寺に到る。佛石跡を拓す。塔尖を望みて其檨銘を得んと欲し、寺僧に謀る。曰、避雷針の為屋上に上るべき設備ありと。則開扉を請ひ二兄を嗾し衣を脱せしめ、器具と水とを腰に纏して登らしむ。二兄曰、若誤りて死せは身を金石文に献せしと傳へむことを遺言し結束して行く。而して嘉一郎は他人の児なり。危きを共にせしむへからず。塔の上層に至りて待つへしと命す。既にして二兄登攀して拓搨す。嘉一郎も遂に上りて共に労に服す。得る處三葉。乃木崎氏に頒ち、其一葉を嘉一郎に與へて記念となす。抑此塔は天武天皇即位八年白鳳庚辰にして、今より千二百三十五年前に當り、特別の形式にして、内外建築學上の珎とする處、近年是を取崩し、材料を補足して以て原形に復せらる。國費を要すること巨萬に及ふといふ。實に保護建造物中の白眉なり。而して此檨銘は淳仁天皇の父君なる舍人親王の御筆に成る。錦上の花といふへし。茲に事實を記述して児等か先途の参考となす。

大正二年初冬於兵庫西出街之僑居

淡州 樂山武岡豊識 樂山

これによると、木崎・武岡・織田の3名は武岡の二兄(博三と四郎)とその学友竹林嘉一郎を伴い、合わせて6名で薬師寺を訪れ、まず仏石跡(仏足石)、次に東塔檨銘の順で拓本を採取した。東塔には二兄が決死の覚悟で登攀し、



図3 武岡豊太旧蔵「薬師寺東塔檨銘」拓本、箱裏書(部分)

嘉一郎も協力して、檨銘の拓本を計3葉手拓し、各1葉を木崎と嘉一郎に分け与えたという。武岡豊太のもとに残された1葉が東野氏所蔵の拓本と考えられる。武岡は同年の初冬に採拓時の事実を記述して、「児等か先途の参考」とした。

こうした採拓事情を知った上で、木崎旧蔵の「薬師寺東塔檨」拓本をながめると、通常の拓本とは異なり、文字の刻まれた箇所のみを墨を塗り、効率よく手拓していることに気づく。少年たちは墨と水を節約しながら急いで3葉の拓本を手拓したのであろう。そのときの様子が目に浮かぶようである。成人後に「身を金石文に献」じた者はいなかったが、武岡博三・武岡四郎・竹林嘉一郎の3名はそれぞれ宮内省・大林組・通信省などに入って活躍した。彼らが少年期に命がけで薬師寺東塔上に登った経験は、「先途の参考」になったであろうか。

[謝辞] 架蔵の武岡豊太旧蔵拓本の画像をお送り下さり、拙稿で紹介することをお許しいただいた東野治之氏のご厚意と、箱裏書の釈文作成時にご教示下さった宮内庁書陵部の高橋勝浩氏のご厚情に、心より感謝申し上げます。

関西大学博物館 2020年度冬季企画展 大坂画壇の絵画—日本・イギリス共同研究展

中 谷 伸 生

2020年12月14日(月)から2021年1月23日(土)まで、関西大学(図書館・東西学術研究所)が所蔵する近世近代の大坂画壇と京都画壇の作品群を展覧して、大坂の画家たちの文化交流に焦点をあてて展覧会を開催した。主催は関西大学博物館、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)である。大坂画壇の画家たちの作品が中心であるが、大坂の画家たちと交流した京都の画家たちの作品も一部加えて紹介した。この企画は、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)、ロンドン大学SOASのアンドリュー・ガーストル(Andrew Gerstle)名誉教授、大英博物館のロジーナ・バックランド(Rosina Buckland)日本部門長、アルフレッド・ハフト(Alfred Haft)学芸員、矢野明子学芸員、同じくティモシー・クラーク(Timothy Clark)大英博物館元日本部門長、大阪商業大学兼同商業史博物館の明尾圭造准教授、京都国立近代美術館の平井啓修主任研究員らと中谷伸生が協力して2018年以来積み上げてきた研究を展覧会として開催した。

ここに至るまでの日英の研究会としては、2018年7月28日に関西大学マルチメディア教室で「大坂画壇と京・大坂の文化ネットワーク」と題して、KU-ORCAS国際シンポジウムが、アンドリュー・ガーストル名誉教授や明尾圭造准教授らによって開催された。2019年4月10日にロンドン大学(イギリス)で、「共作による創造：京一大坂の美術とサロン文化1750—1900」と題して研究集会が開かれ、中谷伸生他の研究発表が行われた。2019年8月2日に関西大学・以文館セミナースペースで「大坂画壇と京の文化をめぐる研究と展覧会企画」と題して、アンドリュー・ガーストル名誉教授を招いて東西学術研究所国際シンポジウムを開催した。

今回の展覧会は、こうした研究集会の蓄積の一端を披露するもので、関西大学博物館展を第1弾として、2022年春には京都国立近代美術館

で第2弾を、その後もロンドンの大英博物館日本美術展示場で第3弾の展覧会を予定(未定)している。大坂画壇を中心とする日本の絵画を世界に紹介する絶好の機会だと思われる。なお、大英博物館には数万点に及ぶ日本美術が収蔵されているが、その中で大坂(阪)画壇の作品の占める割合はきわめて高い。

展示内容を紹介すると、江戸時代後期の大坂では文人画が盛んになり、その流れは京都を圧倒する勢いであった。明治36年(1903)に金港堂から刊行された藤岡作太郎著『近世絵画史』においては、江戸時代後期は大坂に文人画(南画)の中心地が移ったことが詳述されており、大坂の文人画家たちの顕彰がなされたが、その後の多くの美術史家たちは、東京と京都の画家たちにしか目を向けず、大坂の文人画家たちを切り捨ててきたとあってよい。大坂では知の巨人と呼ばれる木村兼葎堂(1736—1802)が活動し、その周辺には、《山水図》を描いた岡田米山人(1744—1820)、《客中詩画卷》の岡田半江(1782—1846)をはじめ、《巖上揮毫・画龍点睛図》(双幅)を描いた福原五岳(1730—1799)や、《掌中延寿》という画帖を制作した濱田杏堂(1766—1814)、兼葎堂の遠縁にあたる三好正慶尼(1729—1806)らの作品が見られるが、正慶尼の《大原女図》は、素人風の形態把握を見せる非常に珍しい絵画である。また、儒者の十時梅屋(1749—1804)が享和3年(1803)に描いた《五柳先生図》(陶淵明図)の豪快な作風も興味深く、学者でもあった梅屋が重厚な思想を踏まえて絵画制作に励んだことが判明する。

近代に入っても、アメリカ人に人気の高い上品な文人画(南画)で知られる日根對山(1813—1869)らが注目すべき活動を展開した。若い世代における文人趣味の衰退が気になるが、21世紀は、こうした大坂の豊かな文人趣味を再評価すべき必要があるだろう。なお、この展覧会では浦上春琴(1779—1846)らの大坂以外の文人画家たちの未公開作品をも展覧した。

江戸時代の写生派について述べれば、京都の円山応挙（1733-1795）と呉春（1752-1811）らの活躍で、多くの写生派の画家たちが生まれたが、それらの中に大坂の写生派の画家たちがいた。彼らの多くは「大坂四条派」と呼ばれてきたが、呉春に因んだ京都の街「四条」という言葉を大坂の画家たちに冠してよいのかどうか、今、その検証が始まりつつある。本展では暫定的に「大坂写生派」として紹介したが、大坂らしいさっぱりとした《親子笥図》を描いた西山芳園（1804-1867）、大阪の名所を題材にした《中の島遊船図》の西山完瑛（1834-1905）、また、大幅《七種草花図》の長山孔寅（1765-1849）らを紹介している。

さらに、幕末明治期では森一鳳（1798-1871）や久保田桃水（1841-1911）らの名所絵を展観した。これら大坂の写生派は、明治期に入り、西洋絵画の手法を採り入れた東京や京都の日本画の後塵を拝するようになり、守旧派として忘れられたが、西洋化（近代化）の終焉とともに、今、再評価の兆しが見えてきたのではなかろうか。

加えて、大坂（阪）では、さまざまな個性的な画家たちが活動し、流派に捉われない様々な画家たちを輩出した。兼葭堂の周辺で活動した戯画作者の耳鳥齋（1751以前-1802/3）はその代表である。今回は「降る金銀を扇にてとる」と言われ、扇面画制作で有名な戯画作者の耳鳥齋による扇面画2点（《顔見世之図》と《正連寺水燈》）を紹介した。また、中国絵画に憧れて奇矯な絵画を描いた林閻苑（生没年不詳）については、中国の仙人を扱った《蜆子和尚図》も見逃せない。



さらに、近代に入っては大阪の風俗を描いて、戯画的・マンガ的な作風を確立した菅楯彦（1878-1963）は、21世紀の絵画世界を予言したといってもよい。面と線を独自の形態処理を用いて描いた楯彦の戯画風絵画は、もっと高く評価されねばならないが、世の研究者や批評家の牢固とした偏見が蔓延して、今なお半ば不問に付されたままである。また、大阪の女性を描いた北野恒富（1880-1947）は、東京の鏑木清方、京都の上村松園と並ぶ近代日本画の3大美人画家だといって間違いはないが、近年では、日本に加えて欧米での評価が高くなりつつあり、多くの作品が海外の美術館やコレクターに購入される状況が続いている。加えて、島成園（1892-1970）の評価も徐々に上がりつつある。文人画（南画）では矢野橋村（1890-1965）が活動し、豪快で奇抜な絵画を制作した江中無牛（生没年不詳）も大正期前後に活動した注目すべき画家である。さらに、野口小蘗（1847-1917）による《百虫図》も珍しい昆虫図だといってもよい。これら大坂（阪）の画家に加えて、大阪の弟子を多く抱えた京都の岡本豊彦（1773-1845）と松村景文（1779-1843）らの未公開作品も本展で紹介した。

最後に、数点のみの展示ではあるが、陶磁器と漆器に絵付を行った菅楯彦と上田耕甫（1860-1944）の作品も展観し、彼らの幅広い活動の一端を確認する資料とした。展示作品は、上田耕甫絵付京焼茶碗《俵牛図》（昭和時代）、同じく上田耕甫絵付鶴蒔絵棗《花卉図》（昭和時代）、そして、菅楯彦絵付京焼茶碗《欄宜荒木田守武像》（昭和時代）である。

以上、展覧会に出品した絵画類は、関西大学博物館のみの展示で、2022年春に開催される京都国立近代美術館での「大坂画壇と京のサロン」（仮称）展には、本展で展示された作品は出品されない。すべて関西大学図書館と東西学術研究所が所蔵する別の作品となる。

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター 研究員

角倉素庵『和歌短冊（雨中鶯）』の再出現

林 進

1 信多純一先生より頂いた『和歌短冊（雨中鶯）』

江戸初期、京で活躍した実業家で思想家、能書の角倉素庵（通称与一、1571～1632）が平生、漢詩や和歌を創作していたこと、また倭歌（古歌）をよく吟じていたことは、寛永10年（1633）4月に建立された木造碑『儒学教授兼両河転運使吉田子元（素庵）行状』（堀杏庵撰文、嵐山・千光寺大悲閣蔵）に「倦則吟倭歌（倦めば則ち倭歌を吟じ）而暢性情」「平日著述文章詩賦議論和歌数十卷、顔日期遠集（顔して期遠集という）」と刻されていることから知られる。大和文華館特別展図録『角倉素庵』（2002年）にその全文の翻刻が掲載されている。

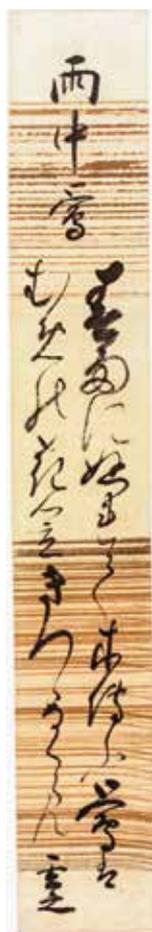


図1 素庵和歌短冊
玄之（素庵）筆



図2 和歌短冊 素庵筆
同短冊本紙の裏面に覚書き
「角蔵与一殿」（別筆）がある。

わたしは素庵が自作の歌を揮毫した「和歌短冊」を長い間、探し求めた。素庵が詠んだ和歌の特徴と趣向、素庵の確かな「平仮名書体」を知りたかったからだ。それは「嵯峨本書体」（古活字版と整版）の基礎研究に必要な資料である。東京、関西の古典籍商や古美術商を尋ね、また書肆が発行する「古典籍目録」にそれを求めたが、見出すことはできなかった。

令和2年の初夏、今まで蒐集した素庵筆の和歌や漢詩の短冊、色紙、卷子や謡本の断簡、また素庵と親交のあった親王、公卿、連歌師、町衆の和歌や発句資料などのささやかなコレクションを整理しているとき、十五年ほど前に（故）信多純一先生（日本近世文学、大阪大学名誉教授、1931～2018）より頂いた『和歌短冊（雨中鶯）』（図1）が出てきた。

信多先生は「これは最近入手した和歌短冊だが、素庵が自作の歌を揮毫した短冊と思うが、君はどう考えるか」と云われ、わたしにその研究を託された。当時のわたしにはそれを判断する能力も自信もなかった。その短冊の真実を認識できなかったのだ。そのうちに、その短冊を段ボール箱の底に仕舞ったことすら、すっかり忘れていたのである。

2 素庵が揮毫した自作の『和歌短冊（雨中鶯）』

『和歌短冊（雨中鶯）』（図1）の法量は縦35・2糎、横5・2糎。本紙は楮紙で、刷毛でもって柿渋を横に軽く刷いた料紙（全紙）を短冊型に裁断したものである。柿渋による筋引きの料紙は、江戸初期の短冊の料紙としてはきわめて異例である。なお、当時の短冊は「打曇り（雲紙ともいう）」（藍の漉き染めで紙の天地を雲形に漉き上げる法）の料紙が一般的である。紙質はおおむね「鳥の子紙」（雁皮紙）である。

短冊の上部中央に「雨中鶯」と歌題を記し、「春雨にぬれて木傳ふ鶯は／むめの花笠きつなくらん」と和歌の〈上の句〉と〈下の句〉を二行に分けて書き、左下に「玄之」と小さく署

名する。和歌短冊の正式の書き方に準じて染筆されている。「玄之」は「はるゆき」と読み、素庵の諱である。全体に自然な筆跡を示しているので、吉田玄之（素庵）の自筆と見て差支えない。この鑑識に至るまで長い時間を要した。

歌意は「春雨に濡れて梅の木や枝を伝え渡る鶯は、《梅の花笠》（梅の花を鶯が縫った笠に見立てた表現）を着け鳴いているのだろうか」である。「むめの花笠」の言葉は、『古今集』巻二十・1081番の「神遊び歌」の「青柳を片糸によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」に典拠がある。また「梅」「春雨」「雨にぬれて」「きつゝ」「鶯」「花」「笠」の言葉は、藤原定家天福二年書写本系『伊勢物語』第二百一段の「昔、梅壺より雨に濡れて人のまかり出づるを見て／うぐいすの花を縫ふてふ笠もがな濡るめる人に着せて帰さん（略）」に依拠している。春雨に濡れて梅の小枝を飛び渡る鶯の軽やかな動き、静かに降る細かい春雨に喜ぶ鶯の囀り、あちこちで梅の花笠を被る鶯の可愛い姿。古歌の世界を再現する自然な詠みに、素庵の歌の特色がうかがわれる。素庵が古歌や古典文学に造詣が深いことを示す。

和歌本文は二字と三字の連綿体で「春雨に、ぬれて、木傳ふ、鶯は、むめの、花笠、なくら、ん」と書き、文字の大小、肥瘦を誇張せず同じ筆致で淡々と流れるように染筆している。その書体は素庵が刊行した「嵯峨本」の活字書体の特徴と共通する。

3 素庵の装飾料紙

素庵は人から古歌の染筆を依頼されたとき、「木版雲母刷り料紙」、「金銀泥下絵料紙」、「彩色下絵料紙」などの美しい装飾料紙に揮毫している。紙質は雁皮紙である。普通、依頼者は十枚、二十枚の装飾料紙（短冊、色紙）を前もって用意して、能書家に届けて置く。

たとえば、『阡陵』第60号（2010年3月）所収の拙論「角倉素庵書写の観世流謡本『三井寺』切」で紹介した素庵染筆の基準作『和歌短冊』（『新古今集』二條院讀岐「世にふるはくるしきものを櫛の屋に／やすくもすぐる初時雨かな」、図2）には「金銀泥水辺の景下絵」の装飾料紙が使われている。この短冊の本紙裏には直に染筆依頼者による覚書き「角蔵与一殿」が小さ



図3 素庵和歌懐紙（伝）素庵筆

く墨書されている。現在、短冊本紙は二枚に相剥ぎされ、覚書きの文字を切り取り、裏面右下隅に貼られている。この覚書きの存在がこの『和歌短冊』の筆者が「角蔵与一」であることを証明しているのだ。

素庵『和歌短冊（雨中鶯）』の柿渋引き料紙は装飾として地味なものであるが、繊細な濃淡の細線はあたかも「春雨」をイメージさせ、絶妙である。

4 素庵の『和歌懐紙』

大和文華館の特別展『角倉素庵』（2002年）に出陳された源玄之（素庵）筆『和歌懐紙』一幅（図3）は、嵯峨角倉家末裔の吉田周平氏の家に伝来したものである。最初に「詠早春和歌／源玄之」と書き、「春くればこゝろの／色のまづ染めて／木々にさきだつ花／の面影」と揮毫する。本紙（縦26・7糎、横37・3糎）は「絹本」である。「懐紙」は字の通り、「紙本」でなければならぬので、この掛幅は「素庵和歌懐紙」の後世の「写し」と考えられる。

昭和10年（1935）11月に恩賜京都博物館（現・京都国立博物館）で開催された「本阿弥光悦展」の出陳目録に「108番、詠早春和歌（素庵筆、端に 詠早春和歌 源玄之）、一幅、京都市、角倉マサ（満智〈マチ〉の誤植）氏蔵」とある。吉田氏にそのことを尋ねると、満智は明治のはじめに茶道の家元、裏千家より養女として二条角倉家に迎え入れられた方だという。吉田氏によれば、吉田家本と角倉満智本とは別ものであるという。現在、角倉満智本は不明であり、素庵自筆かどうかを明らかにすることはできない。

元・大和文華館学芸員、現・大手前大学非常勤講師

コロナ禍の記憶と記録を収集する 「コロナアーカイブ@関西大学」の諸実践

菊池 信彦

1. はじめに

本稿では、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（以下、KU-ORCAS）の研究者を中心とした関西大学内の共同プロジェクトとして実施している「コロナアーカイブ@関西大学」[1]について論じる。

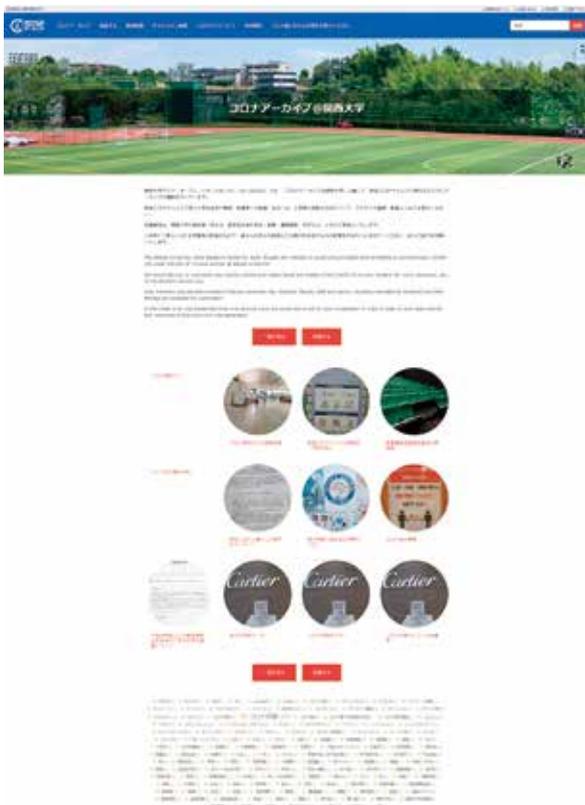


図1 コロナアーカイブ@関西大学トップ画面

コロナアーカイブ@関西大学とは、ユーザ参加型のコミュニティアーカイブの手法を用いて、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の流行という歴史的転換期における関西大学の関係者の記録と記憶を収集するデジタルパブリックヒストリーの実践プロジェクトである。

本稿では、コロナアーカイブ@関西大学の意義を踏まえ、そのシステムや収集資料、実践内

容について紹介していく。なお、本稿は、デジタルアーカイブ学会誌2021年1月号掲載予定の「デジタルパブリックヒストリーの実践としての『コロナアーカイブ@関西大学』」に、加筆修正を加えたものである。

2. 世界の「コロナアーカイブ」と本研究実践の意義

2020年のパンデミック以降、コロナ関係資料のアーカイブプロジェクトは世界中で行われている。その一方で、国内での実施例は浦幌町立博物館や吹田市立博物館などの博物館を中心に数機関にとどまっている。とりわけ、ユーザ参加によるデジタルアーカイブの構築は、管見の限り、コロナアーカイブ@関西大学以外では実施されていない。したがって、コロナアーカイブ@関西大学は、将来起こりうる危機的状況下における同種のプロジェクトの実践に際しては、参照事例になりうるものと言えよう。

3. コロナアーカイブ@関西大学の概要とその特徴

コロナアーカイブ@関西大学を構築するにあたって特に検討を行ったのは、次節以下の4項目である。これらを取り上げることで、概要と特徴を明らかにしたい。

3.1 ユーザ参加型の採用と投稿資格

コロナ関係資料の収集方法を考えた2020年4月初めは、第1回目の緊急事態宣言下であり、外出して資料を集めるということが困難であった。また、デジタルパブリックヒストリーとしてユーザの自発的な参加を意図したことから、ユーザ参加型のコミュニティアーカイブという手法を選択した。しかし、投稿数の予測が困難であったことから、コロナアーカイブ@関西大学の投稿資格は、関西大学の関係者（留学生を含む学生、教職員、校友会会員、併設校関係者とその家族）のみとし、スタートした。

3.2 システム構築と収集対象資料

コロナアーカイブ@関西大学の開発は、簡易かつ早急に構築できることをシステムの要件と

した。この要件に合致するものとして Omeka Classic を選択し、これにより約 1 週間という短い開発期間で公開することができた。その後、2020年 7 月には Omeka Classic から同シリーズの Omeka S へとシステムリニューアルを行っている。開発当初から、テキストだけでなく画像・音声・動画等の各種ファイルも、地理情報つきで投稿できるようにしており、リニューアル後には IIIF への対応を済ませ、ユーザが資料へタグ付けを行うことが出来るソーシャルタギングの機能も備えるようにした。

3.3 権利処理のための取組み

著作権処理のために、一律、クリエイティブコモンズライセンス CC BY-NC 4.0 を付与している。これについては、投稿に際して同条件での公開に同意することを利用規約上で求めている。

また、肖像権やプライバシー権への配慮から、投稿者に対しては、人物が写っている場合にはその人物から投稿許可を得たものかどうかの確認を利用規約で求めており、投稿された写真はその承諾を得たものとして扱っている。その他、ユーザ自身も投稿データを非公開で投稿する意思表示ができるようにしている。

3.4 長期保存体制の確保

KU-ORCAS は2021年度で終了するプロジェクトであるため、収集した資料データの長期保存は、関西大学博物館および年史編纂室が担うことで合意している。

4. コロナアーカイブ@関西大学の資料の現状

コロナアーカイブ@関西大学は、2020年 4 月 17 日に公開し、ユーザの投稿受付を開始した。対面での広報活動が憚られるなか、広報は KU-ORCAS のウェブサイトおよび SNS、学内サイトで行った。しかし、2021年 1 月 8 日現在の資料点数は143点（非公開含む）で、投稿されている資料は、ほぼすべてが画像資料である。

資料につけられたタグ全体を見ると収集資料の特徴が見えてくる。タグは「コロナ対策に関するもの」、「行事に関するもの」が多く、その他に「学内・キャンパス周辺の様子」や「家族の様子」におおよそ大別することができる。これらから、コロナアーカイブ@関西大学が「大学コミュニティ」の表現するコレクションとなっていると評価できる。

5. 収集促進のための取組み

コロナアーカイブ@関西大学の抱える課題は多いが、とりわけ資料点数の少なさが問題であると認識している。

この課題への対応として、筆者らは主に 2 つの取組みを進めている。1 つ目は、Wikipedia のエディタソンにならって名付けた「アーカイバソン」というイベントの実施である。これは、吹田市立博物館と連携し、全国の図書館や博物館等の関係者を対象にオンラインでコロナ関係資料の投稿を募るものである。

2 つ目は、関大関係者のコロナ禍の記憶や思いをテキスト形式で集める「記憶の投稿」である。当初はオーラルヒストリーを予定していたものの、機材や経験、時間の都合もあり、Google フォームを利用して記憶の投稿を呼び掛ける方法を採用した。なお、投稿のインセンティブを高めるために、関大の学生に調査協力費として謝金を支払うようにしたところ、開始数日で100件以上の多数の投稿が寄せられる結果となった。

6. おわりに

本稿では、コロナ禍における関西大学の関係者の記憶と記録を、ユーザの主体的な関与を促し収集するコロナアーカイブ@関西大学の実践について紹介してきた。2021年 1 月初旬の現在、COVID-19 の感染者数は激増し、2 回目となる緊急事態宣言が発出されるに至った。コロナ禍の終息が見通せない中、筆者らの取組みの出口も、まだ遠い先となりそうである。

謝辞

本研究は、関西大学による2020年度「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の克服に関する研究課題（教育研究緊急支援経費）」に採択された「『コロナアーカイブ@関西大学』を核とした新型コロナウイルス感染症およびスペイン風邪の記録と記憶の収集発信プロジェクト」の研究成果の一部である。

参考文献

- [1] コロナアーカイブ@関西大学.
<https://www.annex.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/s/covid19archive/page/covidmemory>, (accessed 2021-01-08.)

播磨地方の祭礼行列

藤岡真衣

神社の祭りをたずねると、町や村の中を神輿が担がれて御旅所へ向かう光景を目にする。神輿の渡御が行なわれる祭りは全国各地にあるが、兵庫県の播磨地方には、特定の家筋が決まった役割をつとめ、渡御行列に奉仕するところがみられる。

兵庫県中西部の宍粟市波賀町安賀の波賀八幡神社では、毎年10月21日に近い日曜日に秋季例大祭が行なわれる。ただし、その年の秋の例大祭に神輿渡御を実施するかどうかは、元日の歳旦祭の後の行なう御籤祭で、籤を引いて決めることになっている。毎年必ずしも神輿渡御をみられるとは限らないため、この祭りの渡御行列は地元以外ではあまり知られていない。2019年、3年ぶりに神輿渡御が行なわれ、調査する機会を得たので、ここに紹介したい。

この神輿渡御では、氏子である安賀・今市、上野・水谷、飯見、有賀、斉木の5地区の人びとが、七十五役を分担してつとめる。七十五役は、「一ツ物」と呼ぶ男児、鼻高面をつけた警衛、幟や鉾・太刀、陣ザサラ、少女神子、獅子頭などがあり、それぞれ役をつとめる家が古くから決まっている。

神輿渡御のある年の秋季例大祭では、本殿祭・直会・騎馬隊安全祈願の後、七十五役の安全を祈る大座の式がある。その後、神輿が渡御する御幸祭（出御祭・御旅所祭・還御祭）が行なわれ、「お旅」と呼ばれている。還御祭の後には、神社の境内で子相撲・餅なげがある。なお、渡御のない年は、宵宮祭・本宮祭・子相撲・余興・餅なげを行なう。

出御祭では、御神体が神社の本殿から神輿にうつされる。その後、渡御行列の順に七十五役が読み上げられ、鉾・太刀などの道具が手渡される。この間に神輿が境内に運び出され、全員が揃うと行列が御旅所に向けて出発する。

その順は、神主（道清祓）—一簀—国旗—一ツ物—騎馬—幟—馬丁—槍—大傘—雑仕—草履取—幟—錦旗—警衛（鼻高）—大麻—大榊—幟—



波賀八幡神社の神輿渡御

鉾—太刀—唐櫃—奉幣—鉾—弓矢—真榊—陣ザサラ—延綱—少女神子（有元神子・田路神子）—神主（波賀八幡神社宮司）—神輿—少女神子（山田神子・飯見神子）—鞍掛—少女神子（中島神子・森下神子）—太鼓—役員（代表総代・副代表総代・氏子総代・自治会長など）—幟—太刀—鉾—太刀—鉾—太刀—鉾—獅子（頭）—子供神輿である。

御旅所は、神社から約500メートル離れた引原川の川岸にある。御旅所内の神輿台に神輿が安置され、行列に奉仕する人びとが揃うと、御旅所祭が始まる。神輿の前で修祓があった後、祭員が御旅所から川原にある祝詞岩と呼ばれる大きな岩のところまで下りて、御幣を振って場を清める（奉幣の儀）。続いて、宮司が岩の上に立って対岸に向けて矢を放ち（威儀弓の儀）、祝詞を奏上する。宮司が御旅所に戻って神輿の前で神事が行なわれた後、少女神子が一人ずつ神輿に参拝する。その後、玉串の奉奠や直会として御神酒と小餅が参列者に振舞われる。御旅所祭が終わると、再び行列を組んで神社に戻り、還御祭を行なう。

七十五役の中で最も重要な役が一ツ物である。一ツ物は渡御行列を先導する役割で、斉木地区の岡田家本家の親族または岡田家が推薦する童児がつとめることになっている。一ツ物は、



馬に乗った一ツ物

直垂に袴、袖なしの羽織を着て、額には左右に2つの黒点(・)をつける。金色に縁どられた笠を被って馬に乗り、襟の後ろに山鳥の羽と尾花を挿す。祭りの間は地面に足をつけてはならないことにな

っており、特別な存在である。

兵庫県南部の加古川市から赤穂市に至る地域には、祭りに一ツ物・頭人・馬乗り・カゲシなどと呼ばれる子どもが登場することは知られているが、波賀八幡神社の一ツ物は研究者の間でもこれまでほとんど知られていなかった。

また、男児の一ツ物に対して、女兒は神子として神輿に奉仕する。6名の少女神子は、飯見神子・田路神子・有元神子・山田神子・中島神子・森下神子と呼ばれる。神子を出す家は決まっているが、出せない場合は親戚または地区の人に頼むという。神子は化粧をし、着物に紫地の袴をはいて頭上に金の冠を戴く。一ツ物と同様に地面に足をつけず、背負われて移動する。

このほかにも渡御行列には、鼻高面をつけて棒を持った警衛2名や、陣ザサラ（びんざさらのことか。数十枚の短冊型の板の端を紐でつづり合わせた楽器）を首にかけて役2名、獅子頭を手に持つ役1名が参加していることにも注目したい。

神社から御旅所へ向かう神輿渡御の行列の様子



背負われた少女神子



鼻高面をつけた警衛

が描かれた明治25年(1892)の「例祭神輿渡御之図」にも、馬に乗った稚児のほか、鼻高面をつけて棒を持つ人、びんざさらを首にかけた人、二人立ちの獅子舞の姿がみえる。

播磨地方には、鼻高面をつけて鉦を持って舞う王の舞、びんざさらを使って踊る田楽、獅子舞などの芸能を奉納する祭りがある。この王の舞・田楽・獅子舞は、中世の祭礼で演じられた芸能で、現在、福井県若狭地方の春の祭りで奉納されているところも多い。



獅子頭



陣ザサラ

現在、波賀八幡神社の神輿渡御では、鼻高面をつけた警衛や、陣ザサラを首にかけて役、獅子頭を持って歩く役が行列に参加するが、かつては獅子舞が行なわれ、王の舞や田楽といった芸能が奉納されていたのかもしれない。

※本稿の祭礼調査は、2019年10月20日に行なった。御幸祭について御教示くださいました波賀八幡神社宮司の小林盛司氏に心から御礼を申し上げます。

<主な参考文献>

『稚児の祭礼—ヒトツモノをめぐって—』(2006年)、
『播磨の王の舞』(2007年)、『兵庫県の祭り・行事—兵庫県
の祭り・行事調査事業報告書—』(2020年)、
いずれも兵庫県教育委員会発行。

関西大学非常勤講師

本山彦一蒐集考古資料に含まれる 後期旧石器時代資料について

渡 邊 貴 亮

はじめに

関西大学博物館に収蔵されている本山彦一蒐集考古資料（本山コレクション）には、蒐集当時には判明していなかった旧石器時代の資料が含まれている。いくつかの資料については既に紹介されているが（山口1981、渡邊2017）、ここでは新たに追加された資料を紹介する。

資料の紹介

①の資料は関西大学博物館においてMY-S0898として管理されている資料である。『本山考古室要録』によると「摂津国武庫郡甲東村甲山東北」で蒐集されたものとわかる。石器にも「兵庫県甲山」の朱書きと「甲山 大正二ノ三」の墨書が残されており、1913年3月に蒐集されたようである。裏面には本山コレクション中で稀に確認される資料管理札が残存しているが、判読は不可能である。甲東村は現在の兵庫県西宮市甲東園・仁川付近に1941年まで存続しており、この付近で蒐集されたものであろう。

本資料は後期旧石器時代後半期にみられる国府型ナイフ形石器である。長さ82mm、幅28mm、重量18.77gで先端を5mmほど欠く。

石核底面を大きく取り込んだ翼状剥片を素材とし、背面に先行する翼状剥片の剝離痕をわずかにとどめる。ブランディングにより打点を除去するとともに素材剥片の形を大きく変形している。ブランディングは概ね70°前後で腹面側から施されるが、後述するリダクション部には対向する調整が施される。

裏面先端部には使用による衝撃剝離痕をとどめており、先端部の欠損とそれによる石器の廃棄に繋がったものであろう。表面上部にも先端からの剝離痕をとどめており、この剝離痕の末端部を起点にブランディングの向きが変更される。側縁がやや内湾してくことから、リダクションを示唆するものであろう。

石材は肉眼観察では二上山北麓産のサヌカイトであり、器面の風化は進行しているが、新欠

部では黒色緻密な石質を観察できる。

②の資料はMY-S0745-8として管理されている資料の一点である。『本山考古室要録』には「石鏃四十四綴概算三千百余」とあるように多量の石鏃とともに保管されている。蒐集地については「東北地方」と記載されているが、現状では日本各地の石鏃が含まれているので、いつかの時点で東北地方以外の資料も一緒に管理されるようになっている。本資料についても詳細な蒐集地は不明である。

本資料は肉眼観察では二上山北麓産のサヌカイト製ナイフ形石器である。長さ39mm、幅26mm、重量5.65gで上半部を折損するが、おそらく二側縁加工の切り出し形を呈するもので後期旧石器時代後半期の所産であろう。不定型なやや縦長の剥片を素材とし、素材背面側から二次加工を施している。結果として石器表面に素材剥片のポジティブな面を、石器裏面にネガティブな面をもつ構成になっている。

折れ面付近に折損後の剝離痕が残されており、リダクションを試みたものの欠損が大きく諦めて廃棄した可能性もある。

③の資料はMY-S1017として管理されている資料の一点である。『本山考古室要録』によると「肥前国東彼杵郡川棚村新ヶ谷」で蒐集され「橋口氏」による寄贈と記載されている。この人物について旧稿では橋口良吉氏の可能性を指摘したが、いまだに確証は得られていない（渡邊2020）。石器の裏面には「肥前 内田付近」と朱書きされており、現在でも長崎県東彼杵郡川棚町の地名が残っているため、この付近で蒐集されたものであるとわかる。

本資料は長さ107mm、幅58mm、重量147.12gの削器である。石材は黒色緻密な安山岩であるが、風化の進行した器面は灰白色を呈し、表面には微細な凹凸が生じている。

石器としては、石核底面を取り込んだ素材剥片の末端部を機能部として、背面側から腹面側への二次加工によって削器として加工されてい

る。大きさ、裏面の剥離痕を考慮すると石核転用の可能性が高い。後述する剥片剥離技術と合わせて評価すれば、後期旧石器時代後半期のものであろう。

剥片剥離技術としては、石核上に剥離面打面を作出し、横長剥片を連続的に剥離している。打点が打面上を左右に移動しながら連続して剥片剥離をおこなうため、作業面は一定ではない。背面中央付近に残された剥離痕では貝殻状剥片が剥離されているが、おそらく意図したものではない。先行する二枚の剥離痕の稜線を取り込む形で大形の剥片を得ようとしたものの失敗し、その後に左側の剥離痕の打面と主要剥離面の打面がなす山形の稜線を鋭角に打撃して、それまでの剥離痕をすべて取り込んだ大形の剥片を得ようとして失敗している。その後に素材となる剥片が剥離されている。

おわりに

本山コレクションの中には旧石器時代の資料が含まれている。詳細は別稿に譲るが、この他にも後期旧石器時代の資料を複数確認している。

海外留学にて旧石器時代の資料に触れて日本でもその可能性を模索した濱田耕作先生、その濱田先生と懇意にし、考古学会に多大な貢献を果たした本山彦一氏、濱田先生のもとで考古学

を学び本山コレクションの整理に携わり、旧石器時代の確認を求めて国府遺跡の再発掘調査や二上山総合調査を実施した末永雅雄先生の三者の多大な貢献の結果がこの資料群に結実している（山口2018、関西大学なにわ大阪研究センター2020）。

この三者が関わった本山コレクションに旧石器時代資料が含まれる意義は大きい。今日では、日本列島中に10,000ヶ所を超える旧石器時代遺跡が確認されており（日本旧石器学会2010）、これからも増加していく一方であろう。しかし、本山氏が資料を蒐集していた頃には、我が国に旧石器時代の遺跡や資料が残されている可能性をどれほどの人が信じていたであろうか。日本列島における旧石器時代の確認は、1946年の岩宿遺跡発見と1950年の同遺跡発掘調査を待たねばならない。また山内清男氏や鎌木義昌氏らの調査により、国府遺跡において旧石器時代の資料が確認されるのは1958年のことである。

本山コレクションが考古学史上重要な資料群であることに変わりはないが、今後は新たな視点からの再評価と活用が希求される。

紙幅の都合上引用文献一覧は割愛します。

文学研究科博士課程後期課程

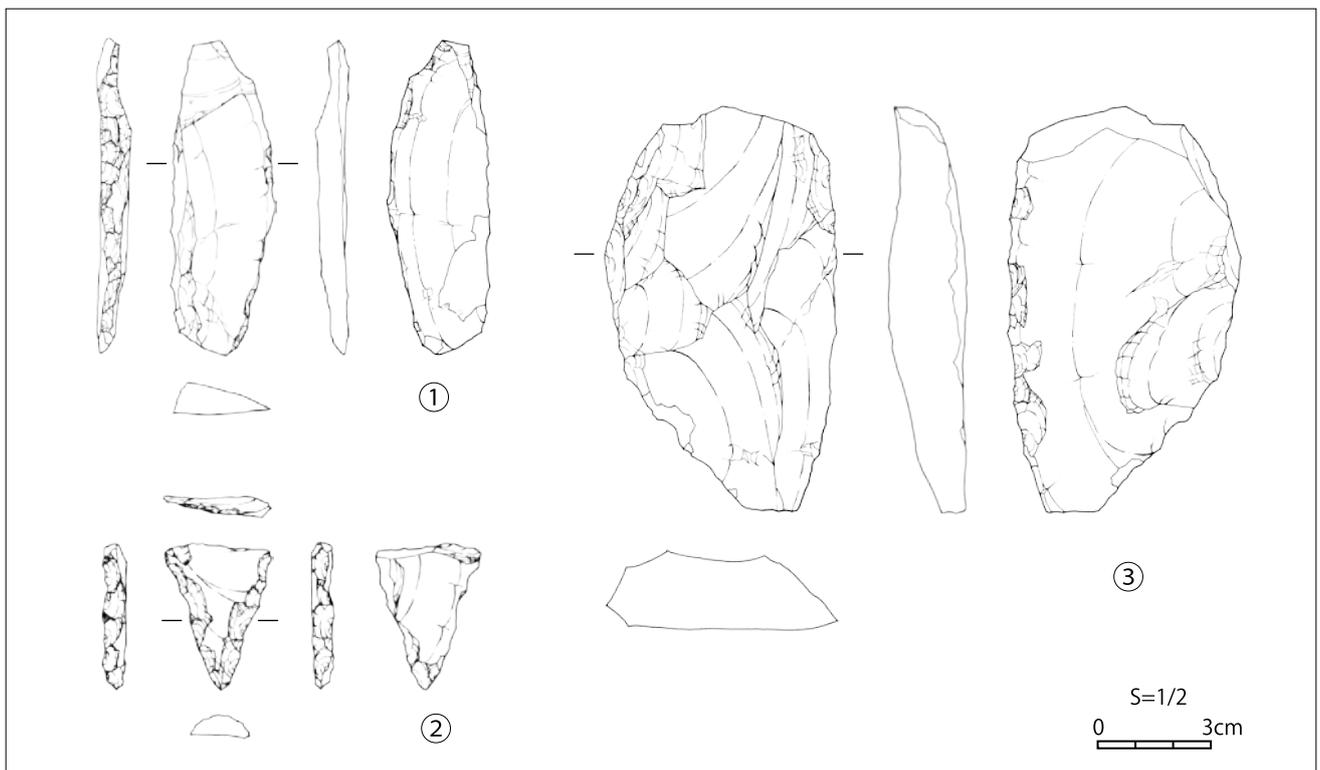


図 後期旧石器時代資料実測図

新型コロナウイルス流行下における 関西大学博物館実習と博物館実習展の取り組み

新型コロナウイルス流行下での博物館実習

関西大学では、新型コロナウイルス感染拡大防止対策の観点から、2020年度春学期は、「インターネットを活用した遠隔授業」を実施したが、秋学期授業については、感染拡大予防策を講じたうえで、原則として対面授業を実施することとなった。

博物館実習の後半の授業は、大学の方針のもと、感染予防対策を講じながら、博物館実習展を中心に、当初のシラバスの内容とおりに行った。ただ、当初では授業の一環としてスケジュールに組み込まれていた博物館等施設の見学は、大阪府下の感染拡大状況により、建造物・景観見学の一回のみであった。また、実習生たちが学芸員を目指すために日々の学習と努力の成果を発表する場でもある博物館実習展は、感染拡大予防のため、当初の開催期間より短縮し、一日のみの開催となった。

このように様々な制限を受けて調整しながら、博物館実習の後半は通常の対面授業の形で終えた。前半の「オンデマンド配信＋3回の実技実務実習」（詳しくは阡陵81号）という形式の授業とあわせて、今年度の博物館実習の授業は終了となった。

新型コロナウイルス流行下の状況で、本来は様々な人、ものと接触しながら学んでいく「博物館実習」という授業の意義を最大限に果たすために、今年度の取り組み以上に何ができるのかは2021年度の「博物館実習」の課題といえる。
(施燕)



写真1 授業風景（実習展の振り返り）

博物館実習（2020年度後半カリキュラム - 金曜日・土曜日：4限5限）			
9月25日・26日	1週目	文化遺産としての建造物	
9月27日		博物館等施設見学（竹中道具館・神戸居留地周辺 景観観察）	
10月2日・3日	2週目	展示計画プレゼンテーション	
10月9日・10日	3週目	展示の技術／実習展での資料借用と梱包／印刷物 等の提出方法について	
10月16日・17日	4週目	博物館の普及広報と情報化、インタープリテーション	
10月23日・24日	5週目	展示指導及び実習展準備作業（学生による自主作業）	
10月30日・31日	6週目	学生による自主作業	
11月6日・7日	7週目	展示指導及び実習展準備作業（学生による自主作業）	
11月8日	8週目	博物館実習展（11/8～13開催、11/13日講評、 11/13・11/14撤去の予定だったが、11/8のみの 実施へ変更）	
11月20日・21日	10週目	資料の借用と運送の現状	
11月27日・28日	11週目	自然史資料の保存と整理	
11月29日		博物館等施設見学（大阪府下の新型コロナウイル ス感染状況により中止）	
12月4日・5日	12週目	展示評価（実習展の振り返り）	
12月11日・12日	13週目	拓本の取り方	
12月18日・19日	14週目	博物館における資料研究、ユニバーサル・ミュー ジウムとしての展示	
12月25日・26日	15週目	1年間の反省・学芸員の課題	

新型コロナウイルス流行下での「実習展」

関西大学の博物館実習は、実習生が取り組む「実習展」を中心に年間の実習プログラムを組み立てている。2020年度の実習展は、新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、これまでとは異なるプログラムに組み替えて実施した。ここでは、その概要を記しておく。

例年の実習展は10月から11月にかけての時期に、1週間の展示期間を設定して行う。春学期には実習展に向けた諸資料の取扱いや学外見学などの実習を積み上げる。7月から9月にかけて展示計画を作成し、10月に展示作業を行う。展示期間中は学内外に公開して来館者への解説に当たる。実習展の前後には展示計画プレゼンテーションやインタープリテーション、展示講評、展示評価などの授業を設定し、学年末のレポート提出をもって、およそ半年間をかけた実

習展が完結する。この実習展は、実習生10人前後を1班として全体で3～4班に分かれて行う。班ごとに展示テーマを設定し、班のメンバーが共同作業を行って展示を完成する。

2020年度の実習展では、感染症拡大防止に向けた全学的な方針のもと、展示作業において実習生が密集することを避けるため、次のようなプログラムに切り替えた。(1) 班分けによるグループ作業は行わない。(2) 実習生1人が1つの「ミニ展示」を行う。(3) 実習展の展観は1日間とし、学内外に公開するが、来館者の密集を避けるため広範な広報は行わない。(4) ミニ展示は、原則として、実習生自身が用意する資料・作品1点に博物館が貸し出す資料・作品1点を加えた2点で構成する。(5) 展示に係る借用事務、調書作成、借用・搬出入作業、展示作業など各実習は、実施時間帯を事前に予約したうえで、担当講師及び博物館学芸員が実習生ごとに個別指導する。

展示は、幅2600mmの展示ケースを2分割して、1台の展示ケース当たり2つのミニ展示とし、全部で20のミニ展示が完成した。ミニ展示のテーマは別表のとおりである。

実習展実施前には、ミニ展示で「博物館実習としての実習展の場」が成り立つのか、実習の個別指導が円滑に行えるのか、さらに「ミニ展示」そのものが成立するのか、といった危惧があった。展観後の展示講評では、「各ミニ展示は、資料・作品2点の展示という困難を乗り越えて展示としてうまく構成されている」、「隣接する展示との調和を互いに考慮して、1つの展示ケース内で2つのミニ展示が違和感なく構成されているものが多い」、「グループ作業では望めない、全実習生がすべての工程を担当する、とい

う実習効果があった」、「展示作業中に実習生が互いの展示を批評しあう姿が散見された」、「企画から完成・撤収までの各工程を班員によるディスカッションを経て実行する協働プロセスがなかったのは残念」、「展観期間が短いうえ、多くの観覧者でにぎわう実習展とすることができなかったため、全体として淡々とした実習となった」などの意見があった。

2021年度の実習展では、通例の、班別展示による1週間展観の実習展として実施する計画としているが、感染症拡大防止策を講じながら、より効果の高い実習展となるよう、柔軟に対応していきたい。

(合田茂伸)

- | | |
|----|------------------------------|
| 1 | 江戸時代の貨幣 ～秤量貨幣と計数貨幣 中国とのかかわり～ |
| 2 | 秤のれきし |
| 3 | 音のないオルゴール展 |
| 4 | 関西大学の記念品を見る |
| 5 | ポータブル音楽の歴史 |
| 6 | 黄檗～今昔を知る～ |
| 7 | 祈り～信仰は海を越えて～ |
| 8 | 人々にとっての鏡～江戸時代と現代～ |
| 9 | 日常の中のフジタ～時代を超えて～ |
| 10 | 鳥海青児と関西大学 |
| 11 | 読・観～漢字を観てみよう |
| 12 | 関大の節日と歩み～記念葉書からみる歴史～ |
| 13 | 戦前の女性の装い |
| 14 | 波佐見焼—大衆のための焼き物— |
| 15 | 暮らしのぬくもり |
| 16 | 大阪市の地震・津波 |
| 17 | 生命を得た看板展 |
| 18 | 「筆記用具の中の動物」展 |
| 19 | 猿の郷土玩具—こめられた願い— |
| 20 | うつわの美—江戸時代に成立した陶磁器— |

2020年度実習展展示テーマ一覧



写真2 実習展展示作業風景1 (11月7日)



写真3 実習展展示作業風景2 (11月7日)

◆ 博物館だより

◇フェイスブックに関大村野建築の動画を掲載

博物館では、フェイスブック「関西大学博物館からのご案内」で、ドローンを使った約5分の千里山キャンパスの空撮動画を公開しています。千里山キャンパスには、建築家村野藤吾が1949年から晩年の1980年にかけて建築した約40棟の建物がありました。そのうちの約半分の建物が現在も残っており、博物館(旧図書館・1955年竣工)は大阪府の指定文化財に指定されています。動画では、土偶のマダムと埴輪のムッシュがキャンパスツアーの案内をしています。

この他にも、楽しい動画や活動記録を掲載していますので、御覧ください。

◇今年度、大阪音楽大学から寄贈を受けたSPレコード「松本コレクション」の整理を行い、約4,000枚とその概要が判明しました。この中から、本学の女子学生第1号である北村兼子氏の講演記録も確認されました。前回お知らせした、ベルリンオリンピックの実況録音などと併せて、なにわ大阪研究センターの研究報告などで披露する予定です。

◇関西大学では、2020年度の秋学期は、新型コロナウイルス感染症拡大防止に配慮しながら、原則対面授業を行いました。このため、博物館では入り口に「厚生労働省新型コロナウイルス接触確認アプリ」と「大阪コロナ追跡システム」等のQR-Codeを掲示し、手指消毒と消毒マットを準備するなど安全対策に配慮し、開館時間も月～土の10:00～12:00と13:30～15:30に短縮し、昼と閉館後に換気と消毒作業を繰り返し行っています。

また、原則対面講義で授業を行うとの決定を受け、実習が多い博物館実習では、関西大学LMSシステムなどを活用し、3密を避けるなどの対応を図りました。詳細につきましては、阡陵本稿をご覧ください。

◇コロナ禍の中、十分な安全対策を施し、2020年度冬季企画展として、「大坂画壇の絵画 日本・イギリス共同研究展」を2020年12月14日(月)から2021年1月23日(土)までの間、関西大学博物館と関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)の共催で開催しました。コロナ禍の中、熱心な来館者の方々316名が訪れました。企画展の詳細内容につきましては、阡陵本稿をご覧ください。



◇博物館では、従来から博物館Webページで『阡陵』の公開を行ってきましたが、2021年4月から標記学術リポジトリでも公開します。関西大学学術リポジトリは、学内刊行紀要に掲載された成果物を登録することで、一層の教育・研究成果の効果的な発信を行い、学術研究の発展に貢献するものです。

・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・

表紙の「集蘭亭字廿六對之一」龍鈕石印(3.6×2.3×6.2cm、山本竟山印章コレクション)は、明治、大正、昭和前期にわたって活躍した書家山本竟山(1863～1934)の旧蔵品です。「竟山先生博祭湖城畔刊癸丑四月」との側款があり、1913年、つまり大正癸丑の年に篆刻家の園田湖城(1886～1968)が竟山のために刻したものです。山本竟山は1913年4月に京都で開催された大正癸丑「蘭亭会」の発起人の一人として、会の準備に大きく寄与しました。本印も「蘭亭会」ゆかりの一類です。

ミニテーマ展「山本竟山之印」は、2021年2月15日(月)から2月26日(金)まで、「占領下日本の輸出商標-東洋棉花株式会社を中心に-」と共に展示・開催しました。



「集蘭亭字廿六對之一」印面